FREEPAPER 第8号 2020年4月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

L' Echange

巻頭 特集

第 8 号

比較文化研究者。二村淳子氏 Chercheuse Junko Nimura

三点測量の比較文化



二村淳子氏 (鹿児島大学総合教育機構 講師)

鹿児島大学で比較文化を研究する二村淳子氏。閉塞感を感じた日本からフランスに飛び出し、発展真っ盛りの中国特派員時代を経て、研究者の道へ。今回の巻頭特集では、二村淳子氏に自身の来歴、研究に対する思いなどを伺いました。

一来歴について

生まれは静岡の三島です。中学校の頃から不登校になり、高校に入ってすぐ退学しました。それでフランス語を習いました。最初に習ったのは 16歳の時でした。大検をとって、芸術の理論を学ぶ学科があったため、成城大学に行きました。在学中に 1年間ボルドー大学に留学し、語学と文明について学びました。そこですごくフランス語が面白いと思い、もう一度戻って来たいと思いました。意外と日本の大学が想像と違っていたのでした。卒業後、すぐに社会人になることにも抵抗がありました。

大学卒業後に、イギリスに小さな仕事があり、働きながら勉強できたので、1年間ロンドンに住んで、仕事をしながら英語を勉強しました。ロンドンは面白かったのですが、フランスにもう一度行きたいと思っていたので、1年後にフランスに戻って、パリ第4大学に入学しました。その時付き合っていたのが、ピエール・バルー (Pierre BAROUH) 氏の息子で、結婚することになりました。結婚して一緒に住んだのですが、そのうち、夫の仕事の音楽制作を手伝うようになり、学部を中退しました。この時点で24、5歳でした。

その時は、バルー氏のサラヴァ (Saravah)・レーベル *1 のサブ・レーベルに関わっていました。私は高校ぐらいからずっとバルー氏のファンでした。サラヴァ・レーベルはピエールの色が強いので、夫と私は、サブ・レーベルからオルタナティブ音楽やBD*2 の雑誌『Popo Color (ぽぽころー)』、を出していました。私は、まみちゃんバンド (Mami Chan Band) に参加し、奇声や出たらめ打楽器を担当していました。サブ・レーベルには、他には、元ピチカート・ファイヴの小西康陽氏がファンを公言されている、トイポップユニット Dragibus(ドラジビュス)も所属していました。この2つのバンドは日本ではポリスターから発売されていました。

*1 フランスで最初のインディペンデント・レーベル。ブリジット・フォンテーヌ (Brigitte FONTAINE) などを発掘。詳しくは、松山晋也 (2017) 『ピエール・バルーとサラヴァの時代』青土社参照。

*2 Bande dessinée の略。漫画を意味する。

1

Urbain





図: 雑誌 « Popo Color »(出典: weirdplanet HP)

« Popo Color » を制作した経緯ですが、BD が好きだったので、日仏 BD の雑誌を作りたい、という思いからです。当時、『Métal Hurlant (メタル・ユルラン)』という SF・ホラー漫画雑誌の編集長と仲が良く、グラフィック関係も、周りに面白い人が多くいたからです。

雑誌『Popo Color』は、青年・スポーツ省 (Ministère de la Jeunesse et des Sports) の助成金を貰い、6号ほどが出版されました。雑誌では、『ガロ紙』*3 で活躍していた人たちの翻訳をしていました。これが90年代の活動です。この雑誌を通じて、『シャルリー・エブド (Charlie Hebdo) 紙』*4 に描いている絵師さん達と知り合いになりました。その後、夫とうまくいかなくなり、自分の未来を見直そうと思って、日本に帰国しました。これが、90年代の終わりです。

帰国後、映画配給会社であるアップリンクで2年間働きました。アップリンク代表の浅井隆氏は、映画だけでなく、雑誌なども企画していました。浅井氏はデレク・ジャーマン (Derek JARMAN) など耽美系の映画が好きでした。浅井氏が好きなことを任せてくれ、編集や監督インタビュー、書籍制作などを経験しました。

その後すぐに、小黒一三氏が雑誌『ソトコト』を作りました。彼は、元マガジンハウスの伝説的編集者です。私は、この雑誌の立ち上げに携わりました。彼は本当に面白い編集者で、先見の明があります。小黒氏に拾っていただいたのです。小黒氏は、ANAの機内誌『翼の王国』なども手掛けています。そこで10年近く、ライターや記者の仕事をたくさんさせていただきました。鹿島茂氏*5のコラム「稀書探訪」の『翼の王国』への掲載は、私の提案で一声で決まりました。

最初の著書、石橋美砂・にむらじゅんこ b.(2000) 『パリを遊びつくせ!―お店・雑誌・レーベルを作った体験的カルチャーシーン潜入記』原書房では、レーベルの話を書きました。文春にこの本の書評を載せていただいたことが、鹿島氏とのつながりの始まりです。その後、鹿島氏の息子さんがカメラマンで、一緒にベトナムに取材などに行きました。これが 2000 年代の初めのことです。松任谷由美氏とも3回一緒に海外に行くなど、小黒さんに様々な機会を頂きました。当初は日本ベースで活動していましたが、途中からヨーロッパベースになり、一人特派員という形で、ヨーロッパから日本に情報を発信するようになりました。

その後、転機となったのが、2003 年に中国・上海の特派員になったことです。ちょうど中国が面白くなっている時で、急激に若者文化などが発展していました。今まで欧州中心だったのが、中国に来て、中国をとても気に入りました。フランスに居たことがあったので、フランスと中国が交わるところが特に目につきました。現地で、中国語を勉強する中で、東アジアの近代化に興味が湧いてきたのです。そこで、にむらじゅんこ(文)・菊地和男(写真)(2006)『フレンチ上海 東洋のパリを訪ねる』平凡社という、フランス租界についての本を出版しました。本の中では、共同租界*6などとの違いについて触れています。書いているうちに、表面的にライターではなく、研究したくなりました。そこで、2006年に、東京大学大学院比較文学比較文化研究室に修士で入学しました。

- *3 1964 年から 2002 年頃まで出版されていた漫画雑誌。
- *4フランスの週刊新聞。
- *5 明治大学国際日本学部教授。フランス文学者、評論家。
- *6 租界は外国人居留地を指す。共同租界は、フランスを除く諸国が管理した租界。



一研究内容について

<mark>ベースは、東アジアの近代化、特に</mark>美術・芸術に関してです。フランスの研究者は、日仏 の比較をしてしまいます。しかし、自分の場合は中国が入ったので、三点測量になりました。 そこが、普通の研究者と違う視点だと思うことがあります。

<mark>私は修士</mark>論文を基に、サンユー (常玉 SANYU) という画家について、二村淳子 (2018)『常玉 <mark>:モンパ</mark>ルナスの華人画家』亜紀書房という本を出しています。サンユーはすごく素敵な絵を <mark>描きま</mark>す。藤田嗣治のように型破りで、モンパルナスで活躍しました。アジアのオークション で一番高い画家でもあります。サンユーは大正時代に日本に来ており、日本的なところも少し <mark>あり</mark>ます。また、中国的、フランス的なところもあります。そのような作品に目がいき、研究 はとても楽しいと思っています。

美術・芸術の近代化というと、フランスが東アジアに近代美術をもたらした美の外交官や、 <mark>先導師の</mark>ような捉えられ方がありますが、作家達の絵を見ると、そうではないというようなと <mark>ころがあり</mark>ます。そのまま受けて入れているわけではないのです。どのように作家や職人が争っ たか、覆したか、という駆け引きが非常に面白いと思います。また、そこに未来を開いていく 鍵があると思います。

特にデザインについて、面白いことがあります。ベトナムは、デザインと作る職人の分業体 制を近代化の中で取り入れました。しかし、これではデザイナーばかり有名になってしまいま す。ハノイに行った東京美術学校の卒業者である日本人教師達はそれに大反対していて、やは り、デザインと作り手は分業できない、作り手がデザインすべき、と 1920 年代に主張してい ました。例えば、ベトナムの国画にベトナム漆画というのがありますが、漆に絵が描かれてい るもので、ベトナムで一番ランクの高い絵画です。どうしてそれが国画になったかというと、 近代化によって持ち込まれた油絵が気候にあっていないということもありましたが、それ以上 に、技術を持っていないとできないということだからです。着想と技術を切り離すことはでき ません。

このように、美術・芸術からはみ出たところに興味があります。ボーダーぎりぎりか、超え <mark>ている作品に興味があります。これは、自分が枠にはまらない人</mark>間だからかも知れません。研 **究会でご一緒させていただいている稲賀繁美先生*7もそうで、臨界・境界と良く仰っています。** 食についても、芸術か否かの境界にあると思うので、料理文化にも興味があります。にむら じゅんこ (2006) 『パリで出会ったエスニック料理』木楽社、にむらじゅんこb. (2012) 『クス クスの謎』平凡社という本を出しています。絵画よりも食はインフォメーションを持っていま す。これだけグローバル化しても、例えば離乳食はかなり近世感のあるものを引き継いでいま す。また、国によってもかなり違います。美術では、「用」があるから下位と思われている食は、

- 若者へのメッセージ

面白いジャンルだと思っています。

自分が若者の時に苦しい思いをしていました。疎外感を感じ、中学校ではいじめられっ子で した。同調圧力やプレッシャーが嫌いで、ルールも嫌いでした。そのため、置かれている狭い 世界を飛び出すこと、10 代はそればっかり考えていました。飛び出す一番の方法は、外国語 だと 16歳の時に気づきました。それが、フランス語を始めたきっかけです。外国語で今いるボー ダーを超えていけたのです。それで、縋るようにフランス語をやりました。父が英語やれ、と 言ったので、反抗するようにフランス語にしました。同じような理由で文学を読んで、芸術に も興味を持ちました。同調圧力は、今は私が子供の時よりももっとひどいと思いますが、もし 私のように自分が住んでいる狭い世界が嫌いだったら、外国語、特にフランス語を勉強するこ とは良いと思います。精神衛生上良いと思います。 (聞き手:江口久美)



サンユー「六頭の馬」1930年代(出典: 亜紀書房 HP)

*7 国際日本文化研究センター・総合研 究大学院大学教授。比較文学比較文化 及び文化交流史を専門とする。

10 年ぶりの «Velib'» 利用記:

私事で恐縮だが、昨年9月末に転職し、大学にて「科学技術史と社会」の講義を担当している。古代ギリシアに始まり、12世紀ルネサンス、16-17世紀の科学革命、そして産業革命と啓蒙主義に差し掛かったところで、12月中旬、幸運にもパリ出張の機会を得た。18世紀の啓蒙主義といえば、その中心地はなんといってもフランス、なかでも『百科全書』は外せない。というわけで、ディドロやダランベールにまつわる貴重な展示があると聞き、国際会議の合間を縫って、パリ工芸博物館(Musée des Arts et Métiers)への訪問を心待ちにしていた。

ところが、である。パリ行きも目前に迫った12月5日、同地では大規模なゼネストが始まった。パリ交通公団(RATP)もフランス国鉄(SNCF)もストライキに突入してパリの交通は麻痺状態、Nation や République 広場周辺はデモ参加者で溢れているとのこと。会議を主催するOECD/NEAの事務局からは、パリ中心部ではなく、会議場に近い Boulogne 界隈のホテルを強く推奨するとのメールが直前になって届く始末であった。

さて、メインの会議も無事に終わり、混乱のパリにて待望の週末を迎えたのであるが、目指すパリエ芸博物館への足がない。地下鉄で動いているのは 1 号線と 14 号線のみ、市内の路線バスは軒並み超満員、タクシーも大渋滞で到着時刻が全く見込めないとのこと。ならばと、学生時代以来およそ 10 年ぶりに、レンタル自転車 «Velib'» を使ってみることにした。Google によれば、パリ西南の Boulogne-Billancourt にあるホテルから中心部 3 区の目的地まで、最短距離で約 12km。登録すれば 30 分は無料、Concorde 辺りで 1 回乗り継げば初期費用 5 ユーロで往復できるはず…との打算から、冬のパリ自転車旅に挑むことにした。

さっそくホテル最寄りの Velib' ステーションに行くと、電動自転車は全て出払っていたが、普通のママチャリタイプが数台停まっていた。天候は生憎の小雨、だが真のパリ市民ならば傘は不要、と自分を鼓舞して自転車にまたがる。Google の最短ルートに従って Boulogne の森を斜めに横切るルートをとったが、途中 2 度も道を間違え、モネ美術館前に出た時点で 20 分が経過。あと 10 分で Concorde まで行くのは無理と判断し、Trocadéro 付近のステーションを検索して自転車を乗り継ぐ。ここからセーヌ川右岸を東進し、修復中のノートルダム大聖堂に寄り道しつつ、ぴったり 1 時間でパリエ芸博物館に到着となった。

ストライキ中だからか、休日にもかかわらず博物館は人も疎らで、じっくりと展示を堪能できたのは大満足。だが、帰路もまた小雨のなか1時間ペダルを漕ぎ続け、ホテルに到着後はさすがに疲れと寒さで堪らず、近くのクリスマス・マーケットにてホットワインを1杯と相成った。

ゼネスト真っ最中のパリで、後にフランス革命へと結実するディドロたちの啓蒙思想を文字通り「体感」できたのは貴重な経験だったが、次回はパリの誇るメトロの利便を享受したいというのが本音である。

(女青: 菅原恒悦)





左写真 1:メトロ Trocadéro 駅の入口……休日の昼間だが閉鎖中右写真 2: Velib' からの一枚……経過時間が表示されるのはありがたい

Spécial

<u>_</u>

Cu

Cuisine

だが、その原稿を校了した日、パリのノートル・ダムの尖塔が火災で焼け落ちてしまった。その後、日本でも建築史関係者によってノートル・ダムについてシンポジウムが開かれたり、文化財関係者がフランスに行ってしまって手薄になったり影響があるのだが(首里城の事情もある)、やはリフランスでも日本でも再建にあたって話題になるのが、焼け落ちた尖塔の出自である。尖塔は革命期に失われた後、修復建築家ヴィオレ=ル=デュクのチームによって1850年代に再建されたものだが、その再建事業で彼は尖塔の高さを元より相当高く設定して、塔の根本には自身がモデルの彫像まで置いて建設した。つまり、中世からあったオリジナルの尖塔を再現するのではなく、再デザインして建設した。このことから、焼け落ちた尖塔の「文化財としての正統性」が問題とされている。「どうせヴィオレ=ル=デュクによる偽物の塔だったのだから焼け落ちて清々する」と言うパリ市民もいれば、「ヴィオレ=ル=デュクによる設計物自体が文化的な遺産だ」と言う歴史関係者もいる。傍では世界中の建築家がガラス張りのピカピカタワーを提案している。

昨年の本誌で、僕は19世紀フランスの修復建築家であるポール・アバディについて少し触れたの

アバディと ヴィオレ=ル = デュクの 旅行記

'ECHANGE



URBAIN

Notes de voyage







上から順に Fig1. Abadie. Fig2. Abadie. 崩れかけた市壁。 Spécial

Vie

i

Sulture

Cuisine

ところで、校了時は不勉強で知らなかったのだが、ポール・アバディはノートル・ダムの再建工事に も関わっていた。ヴィオレ=ル=デュク監修のもと、アバディは次席の監督官(second inspecteur) であった。目下、ヴィオレ=ル=デュクは火事にあった建物の設計担当者として第一級の参考人となっ ているが、ところでアバディはどうだったのだろう、二人はどんな関係性だったのか。

アバディ (Paul Abadie) は 1812 年、ヴィオレ=ル=デュク (Eugène-Emmanuel Viollet-le-Duc) は 1814 年、二人ともパリ生まれである。アバディはボザールで学んだ後、1840 年にキャリアを開始、1845 年まで内務省の建築機関(Conseil des bâtiments civils)に所属していた。とある公共建築の監理を担当することになるが、それを断ってパリのノートル・ダムの修復チームに参加する。一方、ヴィオレ=ル=デュクはボザール出身ではない。裕福な家庭に生まれ、若い頃からスタンダールらがいるサロンに出入りしていた。デッサン学校で先生をした後、イタリアに 18 ヶ月におよぶ旅行に出かける。帰国後、件の内務省の機関に参加し、そこで統括をしていたメリメ(Prosper Mérimée)に目をつけられたらしい。重要な修復工事を任せられるようになる。ヴェズレのバシリカやモン・サン=ミシェルに関わった後、パリのノートル・ダムの修復を手掛けることとなる。

二人の性格の違いを表すような史料がパリの美術史研究所に納められている *1。史料は Souvenirs de la Commission des arts et édifices religieux et du Comité des inspecteurs généraux des édifices diocésains というので、いわば教会建築機関による回想録となるだろうか。中には研究旅行の成果と



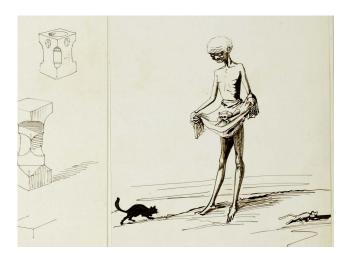


*1 Souvenirs de la Commission des arts et édifices religieux (1849-1855) et du Comité des inspecteurs généraux des édifices diocésains (1853-1871), Bibliothèque de l'Institut National d'Histoire de l'Art, collections Jaques Doucet (Collections numérisées de la bibliothèque de l'INHA, https://bibliotheque-numerique.inha.fr/collection/item/10448-redirection).

上から順に Fig3. Abadie.(1852) Fig4. Abadie.(1861)

上から順に

魔?







思われる絵が納められている。史料は転載OKなので、絵を見ながら二人のタッチを見てみよう。

アバディの絵は 20 枚が収められていて、その全てが農村の風景や遺跡、自然を描写したものである。 素直にペンでスケッチしたものが多い。どちらかというと構図が少し崩れかけていて、丘の上の建築 もバランスを崩して危うい印象を残す。ただ、丘の上の建築が多いのは、彼のその後の代表作品にも 連なるようなものがあるというと言い過ぎだろうか。

ヴィオレ=ル=デュクはもう少し装飾的で、そして中世建築研究者よろしく動物が多い。人間とモ ンスターの間、擬人化された動物も多い。まるで生きているガーゴイルである。中世らしい平面的な 肖像もある。農村風景も描いてはいるが、遠景に描いてある山と思っていたものが、実は一つの町の 大きさほどもある白熊のようなモンスターであったりするので注意が必要である。悪戯で遊んでいる ようなヴィオレ=ル=デュクに対して、実はあまり中世建築スケッチに興味がないアバディといえる

だろうか。そして、他の人間の絵はさらに遊んでいたりする。

蛇と猫の対決、東洋風の七福神にいそうな神様風の赤ちゃんかおじさん、こちらに向かって本を示しながら何か話している悪魔、トムとジェリーとガイコツ、服を着て遠くを見る犬、ポーズをとる老人悪魔、ほとんどバンド・デシネである。これらの多くの絵を描いた Ruprich Robert というノルマンディの建築について重厚な本を残した人間の絵には建築が一つもない。

これらは提出物なのだろうか。いずれにせよ、古典主義的な重々しさは全く感じられない。ボザールのローマ賞受賞者が描くイタリアの古代建築スケッチからひしひしと伝わるような「正統性」とは 無縁に見える。自国の地方都市を素描しているのだから尚更だろう。気ままなスケッチ旅行の感じで







上から順に Fig8. Viollet-le-Duc(1860). 上 に 注目 Fig9. P.Mérimée(1852). メリメも 描く。

Fig10. Ruprich Robert. 耳たぶ。

Fig11. Ruprich Robert.本と悪魔。 Fig12. Ruprich Robert. 悪 魔 の

上から順に

ポーズ。





あり、空想的、物語的、なるほどロマン主義的である。 これらは 1850 年代に断続的に描かれているので、 アバディとヴィオレ=ル=デュクはノートル・ダムの工事前後にこうした旅行に出かけていたわけだ。

ノートル・ダム後、アバデイは教会建築の建築家としてアングレームやペリギュ、ボルドーなどフランス南西部で重要な仕事をした後、1874年にパリ大司教区建築家(Architecte diocésain de Paris)の任をヴィオレ=ル=デュクから引き継ぐこととなる。二人は19世紀中葉の同じ業界で重要な仕事を共有していたわけだ。歴史的にはアバディはヴィオレ=ル=デュクの影に隠れているかのように見えるが、彼はその前の年、1873年にパリのモンマルトルの丘のサクレ・クール寺院のコンペに勝って、自らによるオリジナルのモニュメント・デザインを提出して勝っているのだから、建築家らしい野心はアバディの方があったかもしれない。ちなみに彼はいくつかのプロジェクトでたびたび予算超過を演じ、その額も甚だしかったらしい。

ノートル・ダムはそんな二人の共同作業だったろう。自由なヴィオレ=ル=デュクに乗じて、野心的なところもありそうなアバディが「パリの真ん中、尖塔たかくしていいと思います!!」と言ったかどうかはわからない。しかし、二人の旅行記は19世紀にフランスで始まった文化財業界が黎明期にもっていた親密で自由で瑞々しい気分を知らせてくれる。それから150年以上が経った今日、文化財はめっきり観念的に捉えられるものとなってしまったようだが、始めた人間たちにとってみれば、それはまた他の観念からの開放の瞬間でもあったろう。分断した議論が蔓延る今日、彼らのような楽しい作業、目の前の材料を活かす作業が必要な気がする。 (文責:角玲緒那)

わたしと CULTURE フランス文学のつきあい方、 おすすめ文学作品の紹介

わたしは英文学科の学生で、主にシェイクスピアについて勉強していました。しかし、一昨年の ボルドー留学を機に、フランス文学について学び、英文学よりもフランス文学作品を読み漁るよう になりました。なぜ、わたしはフランス文学に魅了されてしまったのでしょうか?

それは語学学習者として、フランス独特の精神と言語活動(批評に長けた、巧妙な表現方法など) に関心を持ったからです。英文学に体現される可笑しさや滑稽さのユーモアも良いですが、フラン ス文学にはそれとは異なった、皮肉で人間味のある面白さがあると思います。そして、日本人であ れ読者として、身の周りの人間たちと重ね、社会や生活との親近感を持つことができる点に魅力が あるでしょう。

フランス文学作品で描かれている人間像を見たときに、どこかわたしの生きる世界を見ている印 象が残るのです。それは美しさ、強さや理想を語るだけではありません。苦悩、虚栄心や嫉妬など の人間の弱さを細かく心理分析し、ありのままに伝えています。それらの作品が、わたしの経験や 生活と馴染んで、新しい視点やあらゆる教訓として身につけられます。小説を読んだときの、この 感覚がとても好きです。これが、わたしとフランス文学のつきあい方です。

さて、今回は最近読んで印象的だったフランス文学作品を2つ、軽いあらすじと個人的な感想 を添えて紹介していきます。

・ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ (l'Insoutenable légèreté de l'être)』 1984年

光と闇、暖かさと寒さ、存在と不存在…など、ある哲学者は世界が二つの極に二分されているこ とを提唱しました。肯定的なものと否定的なものに分けることは単純に見えますが、重さと軽さで はどちらが肯定的でしょうか?この対立はあらゆる対立の中でもっともミステリアスで、もっとも 多義的なものです…。

という疑問を述べたのち、突然、物語は始まります。この作品はプラハを舞台に、ある医師と妻 と愛人の恋愛事情にまつわる物語です。

結論からいうと、内容はとても簡単ではありません。時間軸もバラバラですし、当時のチェコの 時代背景やプラハの春について知っていないと理解できない箇所があるでしょう。それでもなお、 わたしは彼がこの作品で語った人生観に感動しました。人生は一度きりの全てが本番、つまり本番 のための練習は出来ないのです。これまで選択してきた数々の出来事(経験)を考えると、ひとつ ひとつの選択に対する責任は人生を左右するほど重かったのだと改めて感じました。さらに、長い年月をかけて重なった数々の偶然の上に、今が成り立っていることも、感慨深いものです。ただの恋愛小説ではなく、歴史的で哲学的な小説でもあり、さまざまなテーマが盛り込まれています。わたしはこの物語を通して、新しい人生観を学ぶことができました。ニーチェやサルトルなどの哲学者や、ベートーヴェンといった音楽家も登場します。長編ですが、哲学や音楽に関心のある方も楽しめるのではないかと思います。







ミラン・クンデラ (Milan Kundera)

チェコスロバキア生まれのフランスの作家。1975年にフランスへ亡命していたが、昨年12月にチェコの市民権を改めて獲得した。『存在の耐えられない軽さ』がベストセラーとなる。

写真左上:集英社文庫版(出典: Amazon HP)

写真右上:映画版ポスター(出典: Yahoo HP)

写真下: ミラン・クンデラ氏(出典: discogs HP)

・フランソワーズ・サガン『悲しみよ、こんにちは (Bonjour Tristesse)』1954年

この作品は南仏カンヌを舞台にバカンスを過ごす、少女セシルの物語です。17歳の頃、父と愛人エルザと3人でバカンスを送っていたところに、アンヌという女性が現れたことで平穏な状況は一変します。

良心の呵責、恐らく誰もが体験したことのあるものだと思います。この物語はそのような感情を読者に思い出させ、切なくて悲しい共感を与えてくれるでしょう。憧れ、同情、嫌悪感、嫉妬、倦怠感などの繊細な感情を抱き、人間味あるセシルの様子を想像し、楽しむことができました。また、個人的にはアンヌの人物像、彼女の教養と品性の良さ、手入れの届いた容姿、油断のない巧妙さなどの描写に魅了されました。彼女に対するセシルの気持ちを読み解くと、憧れと嫉妬は紙一重だと改めて感じました。各登場人物の容姿や心理描写がとても細かいので、外国文学であるにも関わらずイメージがつきやすいです。

さらに、この作品では人物以外にも、カンヌの海、太陽、森林など自然の描かれ方がとても美しいです。一方でバカンス生活はスポーツカーやカジノなどの描写もあり、優雅なブルジョワ階級を想起させます。このような環境のなかで、セシルを通して少女心の可笑しさ、気だるさや残酷さを味わえた作品でした。短編小説で、フランス語も比較的容易なのですぐ読み終えることができ、おすすめです。

以上で作品紹介を終わります。各作品の感想や解釈はあくまでも個人的なものですが、わたしの 日常に溶け込み、豊かにしてくれることは言うまでもありません。上記で紹介した作品はどちらも 映画化されています。映画と小説を比較しても楽しめる作品ですので、ぜひ一度手に取ってみてく ださい。 (文責:古賀優佳)





写真左上:新潮文庫版(出典 Amazon HP)

写真右上:映画版ポスター(出典: wikipedia)

写真下:フランソワーズ・サガン 氏(出典:medium HP)

フランソワーズ・サガン(Françoise Sagan)

フランスの小説家。南仏カジャールで、ブルジョワの家庭に生まれる。19歳の時に『悲しみよ、こんにちは』を書き上げ、人気を博した。以後も数々の小説を世に送り出している。

アンズとアーモンド

夏、フランスの朝市には橙色の山が現れて、八百屋さんで順番を待つ人々の目を引きつけます。この橙色の正体は、生のアンズです。20世紀フランスの詩人、フランシス・ポンジュは、この果物を次のように描き出します。

「アンズの色は、それが私たちに最初に触れるのだが、極めてふんだんに、そしてこの果物の形になるよう寄せあつめられたのち、奇跡的に、際立った風味と同じくらいの濃度で果肉丸ごとにいきわたっている。」(「アンズ」『大作品集 III』 所収)

そしてその色は、「オレンジのグラデーション〔音階〕」、「主要な、強い色調〔長調の、繰り返される音色〕」というように、色彩と音楽の二重の意味を持つ語句で表現されます。

らに、いささか唐突に、アンズは月に喩えられます。「だがこの月は、その光輪においては、くぐもった言葉で〔遠回しに〕しか聞こえない、とろ火でのみ、そして弱音ペダルを用いるときのように。/ その最も鮮やかな光線は中心に向かって投射される。」

この文章は、はっきりした光は実の内側にあり、外側ではぼんやりとした調子でしか見えない、という視覚に関する内容を、聴覚の表現で語ります。鍵となるのは、内側の光(音)が外側では和らげられたものになる理由、すなわちアンズの和毛です。起毛した表皮が、ピアノの弱音ペダルを用いたときのフェルトの役割を果たし、音を和らげ、月をおぼろにするのです。ここでは事物そのものの姿を表現しようとするポンジュらしく、視覚と聴覚に加えて触覚が暗示され、一般に人間がアンズを捉える際に重視するであろう味覚と嗅覚よりも強調されています。

毛に加えてポンジュが注目するのは、二つの部分に分けられるべくうっすらと刻み目がついた実の形です。曰く、「そこにはすでに、アンズをオレンジから遠ざけ、たとえば、緑のアーモンドに近づけるものがある。」

アンズは「ジャムスプーンを二つ合わせた形」をしています(ジャムというのは生のアンズがその後に辿りうる運命と 結びつけてのことです)。アーモンドもアンズやモモと同じ科に属し、日本ではあまり目にすることはありませんが、そ の果実は二つのスプーンを合わせた形をしていて、和毛の生えた表皮をもっています。薄い果肉にもかかわらず、種の 殻を割って乳白色の仁にたどり着くのは簡単ではありませんが、ナッツとして食す通常のアーモンドとは別の、みずみずしい美味し さがあります。わたし自身、フランスへ行くまでは写真でしかアーモンドの果実を知りませんでしたが、実際に触れてみてようやく、このポンジュの文章の意味が十分に理解できました。

て、アンズに戻りますと、市場の八百屋さんではときに、列をなす 客に試食をさせてくれますが、ほかのものに比べてアンズをくれる 機会は多いように思います。日持ちがしないので売りさばきたいと いう事情もあるでしょうが、大きさがちょうどよく、一個を半分に割って、二人 の客に出せることもその理由でしょう。そこには、たまたま隣り合わせた見知ら ぬ客と「スプーン」の片割れを持ち合う愉快さがあります。



(文責:綾部麻美)



L' Echange

日仏工業技術会では新規会員を募集しています 趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を問わず歓迎です。

下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。

http://www.sfjti.org/about/admission/



江口久美 九大・決断科学センター Kumi EGUCHI

やっと第八号が完成しました。今回は、比較研究者の二村淳子氏にインタビューをさせていただきました。三点測量による文化比較の面白さに触れることができました。編集特派員も随時募集していますので、お気軽にご連絡ください。



菅原慎悦 関西大学社会安全学部 Shinetsu SUGAWARA

昨秋に転職し、関西にて新たな人生を歩み始めました。思い切って車を手放し、公共交通 +自転車主体の生活に切り替えてみました。 JR 新快速には迷わず乗れるようになりましたが、梅田の地下ダンジョンはまだ攻略途中です。



角玲緒那 (株) 建文・建築文化研究所 Reona SUMI

いつもありがとうございます。いつかノート ル・ダムに入れますように。



古賀優佳 九州大学大学院人文科学府 Yuka KOGA

一昨年のボルドー留学を機にフランス文学に 関心を持ち、卒業論文も仏文学についての研 究を行ないました。語学の勉強も兼ねて、フ ランス文学作品を幅広く読み続けています。 読書の他には猫を観察すること、辛いものを 食べることも趣味です。



綾部麻美

慶應義塾大学

Mami AYABE

「アーモンド色」は、ファッションの分野ではよく用いられます。つやのない穏やかな薄緑で、湿り気のない色合いがさわやかです。口にするナッツの方では、ギリシャのアーモンドの美味しさが忘れられません。

sfjti 日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生(東京大学名誉教授)が、1955年フランス大使館文化部(1969年独立して現在フランス大使館科学技術部)参事官(当時)C.d'Aumale 氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】

連絡先

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 E-mail : info@sfjti.org HP: http://www.sfjti.org/

日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て1955 (昭和30) 年に設立され、日本とフランスの工業技術の紹介と普及および両国の技術者の交流促進を目的として活動してきました。日仏両国と深い関係にある企業や研究機関、内外の最新知識を求める技術者、研究者、学生に加入していただき、日仏会館関連の学会の一つとして、最新の有益な情報を会員の皆様に提供しています。

フランスは芸術やファッションと食文化の国として知られていますが、同時に科学や産業技術の面でも最先端を行く国の一つです。フランスの優れた科学技術を知るために、日仏工業技術会はいくつかの専門委員会を置くとともに、「建築・都市計画」「鉄道・交通」「原子力」「情報通信」などの分野の最新テーマを選び、両国の専門家によるシンポジウムやフォーラムを開催して、日仏間の情報の架け橋となってきました。

年二回発行する『日仏工業技術』誌は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「先端医療技術」、「水素エネルギー」、「繊維が紡ぐ日仏交流」、「木質建築の現在と未来」「都市鉄道の近未来」など、様々な切り口で毎号に特集を組み、底流になる日仏の文化の差異なども紹介しています。創刊60周年記念特別号『現代科学を問い直す』は、科学技術のあり方の根源を求めて2016年に開催した連続講演会の内容を掲載しています。また、フリーペーパー『L'Echange』は若手研究者が編集し、最新のフランス情報を提供しています。

毎年秋には、在日フランス商工会議所とともに、富岡製糸場、海洋研究開発機構、神奈川県立がんセンター、キッコーマン野田工場など、先端技術の現場や日仏交流の遺産などの見学会を開催しています。

一人でも多くの方が入会されて、日仏交流の活動に参加してくださいますよう、心からお待ちしています。

日仏工業技術会会長 菅 建彦







日仏工業技術会

入会申込書

入会申込日: 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員(5千円/年) 学生会員(2千円/年)					
	(○で囲んでください)(いずれも入会金は無)					
氏名	ふりがな:					
	漢字表記:					印
	英語表記:					
生年月日	西暦	年	月	日生		
勤務先・在学先						
(部署・学科まで)						
勤務先住所	₸					
	TEL:		FAX	Χ:		
	E-mail:					
自宅住所	₹					
	TEL:		FAX	χ:		
	E-mail:					
会誌送付先	勤務先・右	E学先	自	宅	(○で囲	囲んでください)
学歴	大	学	学部	ζ	学科	年卒業・見込
	大学	学		研究科		専攻
				修士課程		年修了•在籍中
				博士課程		年修了•在籍中
専門						
通信欄						

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会

e-mail:info@sfjti.org

振込先:みずほ銀行 恵比寿支店恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506

三井住友銀行 神田支店 普通 0321637